専門新聞大会フェスティバル 盛大に

日本専門新聞協会 加盟各社や政官集う

日本専門新聞大会フェスティバル会場風景（帝国ホテル「孔雀東の間」）

公益社団法人日本専門新聞協会（楢原茂理事長）は10月20日、東京都千代田区内幸町の帝国ホテルにおいて第68回新聞週間・日本専門新聞大会フェスティバルを開催した。当日は、協会加盟各社関係者をはじめ政・官界、韓国専門新聞協会からも多数の来賓が出席した。

第一部 五木寛之氏 時局講演

第一部は、午後3時30分から作家の五木寛之氏による時局講演会「いまを生きる力」が行われた。

五木氏は「先日数字を見て驚いたが」と前置きした上で、1965年には75%だった戦争体験者が、13年には15%まで減少したことを紹介。戦後70年について記者からコメントを求められた時のことを振り返り、「はっきりとした言葉に表せず、ぼつんと出てきたのは『日本が70歳になった』という言葉だった」と述べた。「この国が戦後、新しい民主主義国家としてスタートしてから70歳になったという意味だ」と説明した上で、「私たちは戦後70歳を迎えた。そのことを、はっきりとわきまえなくてはならない」と呼びかけた。

さらに「人生は青春、朱夏、白秋、玄冬の4つに分けられる。70歳になった現在の日本は白秋期に差しかかっているが、それを悲観してとらえることはない。考え方を変えて、年を重ねることは豊かになることと考えるべき」と指摘。

これまでの日本の歩みを登山に例えて「必死に岩肌を登り、山頂から下界を見下ろし、達成感に満たされる瞬間が高度成長の時期だった。登山には必ず下山がある。足元を丁寧に確認しながら、慎重に山を下りていく。登る時とは違い、息も切れない気持ちにも余裕がある。その合間に行く末や何十年という歴史を振り返り、落ち着いた足取りで麓へ向かうのが下山である」との考えを示し、「高齢に達することを、下り坂に差しかかることと考えてはならない」と強調した。

今後の日本の進むべき方向については「高度成長期は、生産労働人口が一番幅広い時期だった。その時と同じように高度成長という夢を追いかけるのではなく、違う方向へと夢を転換させるべき。成長より成熟を選ぶ方向に、日本の産業も経済も政治も、今後は視点を変えていかなければならない」と訴えた。さまざまな歴史上の文明は、高度成長期を過ぎた時期に文化の黄金時代を迎えていると指摘。

「東京の街を見渡すと活力を感じるが、100年後にどうなっているだろうか。50年単位で造りかえる建築物は、文化と言えるのか」と問いかけた上で、「文化遺産として後世に残るようなものを作らなければならない。成長より成熟に軸足を移し、文化的成熟に向けて進んでいくべき」との道筋を示した。

さらに日本の背負った高齢社会が白秋期であり、玄冬期へと続く季節として「その中でしか生み出せないものがある」と言明。「メディアの世界で生きてきた人間としても、見るべきものをちゃんと直視するのは勇気の要ることだが、大事なこと。私は希望を持って、新しい時代と向き合いたい」との考えを述べるとともに、「我々は峠を下りて、ゆっくりと下降する過程にある。新しいことを始めるには、一度麓に下りなければならない。下りることを悲観的でなく『豊かな下山』と考える。経済的な成長が終わったあとに文化的な成熟が訪れるのだと、明るい希望を持ってとらえていただきたい」と呼びかけた。

乾杯の音頭を取る中山泰秀・衆議院議員

第二部 式典

午後5時20分からは第二部の式典が開かれた。長尾浩章大会運営委員長の開会宣言、楢原茂大会会長のあいさつ、青柳正規文化庁長官の祝詞（佐伯浩治文化庁文化部長代読）、来賓代表の祝辞が行われた。さらに加盟社代表者顕彰、加盟社役員表彰、加盟社優良社員表彰、写真コンクール入選作発表、キャッチフレーズ入選作発表と続き、最後に大会アピールを発表した。

楢原大会会長は「今年は終戦から70年という節目の年。戦後70年、国土の再構築のため、官民一体で復興させた。この力の源泉は国民の識字率の高さであり、他に類を見ない勤勉さにほかならない」と述べた。

戦後の日本経済について「東京オリンピックや同時期の経済政策により飛躍。その後、さまざまな困難を乗り越えたが、バブル経済の反動が大きく、平成不況の誘因となった」と解説。「平成不況の要因であるデフレからの脱却として、第二次安倍内閣が掲げたアベノミクスによる三本の矢の一つである金融緩和により、日本経済は復活しつつある」と評価する一方で、「高齢化に伴う社会保障、格差問題、労働人口の減少などの諸問題について明確なビジョンの策定が早期に求められている」と指摘した。

さらに、今年で68年目を迎えた当協会に言及。「専門情報媒体として、IT社会における迅速な情報発信に加え、価値ある専門的な情報を使命として、さらなる努力を続けようではありませんか」と強く呼びかけ、あいさつとした。

第三部 レセプション

第三部のレセプションは、午後6時45分に開会した。

初めに日本専門新聞政治連盟の大塚一雄会長があいさつ。10月7日に発足した第3次安倍改造内閣について「経済成長や社会保障、子育ての問題などに積極的に取り組み、アベノミクスも総仕上げを迎え、日本経済に明るい兆しがみえてきている」と評価。

また、消費税10%への引き上げの実施に対しては「我々は創立から68年の間、社会や政治経済などのあらゆる分野において真摯な努力を続けてきた。日本は、世界に冠たる先進国。知的文化推進の一番の要となる新聞、書籍を軽減税率の対象にしていただきたい」とし、出席した衆参国会議員らに支援と協力を呼びかけた。

講演会の様子（五木寛之氏）

来賓祝辞（要旨）

文化庁文化部長　佐伯 浩治氏（長官祝詞代読）

情報通信技術の発達により、出版業界は著しく変化してきた。活字文化を担う新聞は、我が国の文化の発展に欠かせない。産業や経済、教育など幅広い分野で情報提供を通じ社会の発展に寄与してこられた皆様に改めて敬意を表する。我が国の芸術文化の発展と世界への発信のために、一層のご尽力をお願い申し上げます。

総務大臣　高市 早苗氏

日本が戦争に負けて、多くの方が生きるだけで精一杯、食べるだけで精一杯という状況の中で、ペンを持って立ち上がり、日本の経済の発展のために、昭和22年の創立から協会の皆様が努力し、今日までそれぞれの分野でより専門的な知識の普及を進めてこられた。皆様のご活躍に心から敬意を表したいと思います。

法務大臣　岩城 光英氏

幅広いそれぞれの分野で専門的な検討や分析を行ってこられた。一般紙とは異なる視点から、深く掘り下げた記事を的確に報道しており、各分野の方が最も頼りにしているのが専門新聞だと思っている。皆様のますますのご発展とご活躍を心より祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

前国土交通大臣　太田 昭宏氏

国交大臣だった間、メディア対応には特に気を遣っていたが、正確に書いてくれたのが専門新聞の皆様だった。自分も新聞記者をしていたので、見出しとしてどうとらえるかが勝負と考える。新聞について考え、編集作業に従事する皆様の活躍があってこそ、行政の生の話が率直に伝わる。心より感謝を申し上げます。

参議院議員　山東 昭子氏

今はインターネットで精度の高い情報が早く配信される時代。読者にとって、新聞そのものが本当に価値のあるものかが重要。魂のこもった、さすがと言われる記事を読者は期待している。皆様が本気で内容を精査し、素晴らしい専門新聞を今後も作り上げていくことを祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

韓国専門新聞協会会長　李 徳秀氏

日本と韓国の両協会は1991年から親睦と交流を通して互いに発展を遂げてきた。今後も両国の協会は、メディア環境がどう変化しようとも、専門新聞産業を発展させるため、より一層交流の幅を広げていくことを期待する。日本専門新聞協会のさらなる発展と皆様の健康を祈念し、あいさつとさせていただきます。